

中千禾夫戯曲全集

2

白水社

田中千禾夫戯曲全集 第二卷

定価 四〇〇円

一九六〇年六月一五日印刷
一九六〇年六月二〇日発行

著者略歴

一九〇五年生
一九三〇年慶大仏文科卒
劇作・演出専攻
昭和二九年度読売文学賞受賞
昭和三四年度岸田演劇賞受賞
昭和三四年度週刊読売戯曲賞受賞
昭和三四年度文部省芸術選奨受賞
主要著書
「物言う術」

著者 © 田中千禾夫

発行者 草野貞之

印刷者 山田博

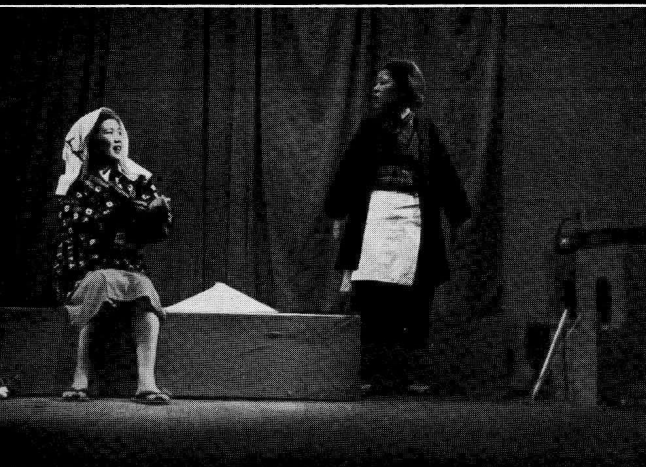
発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京 〇七八一―五
振替東京 三三二二八

三陽社印刷・加瀬製本

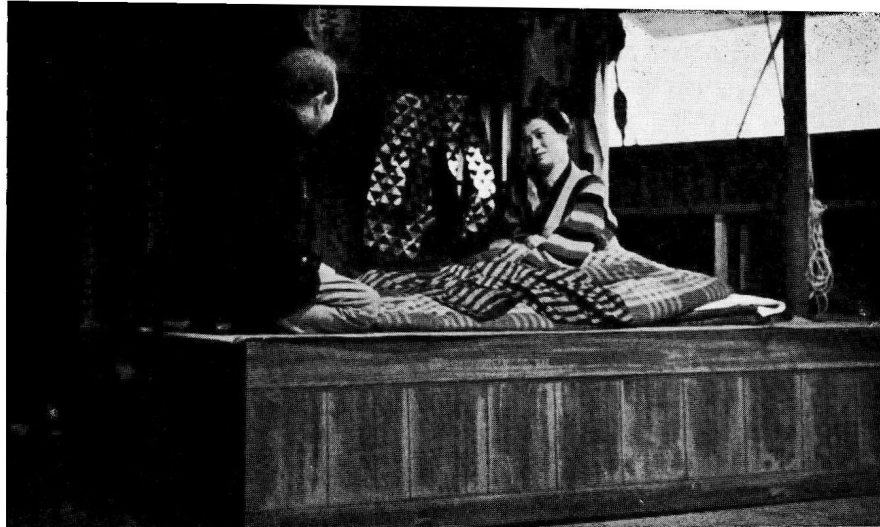


女 猿 俳優座



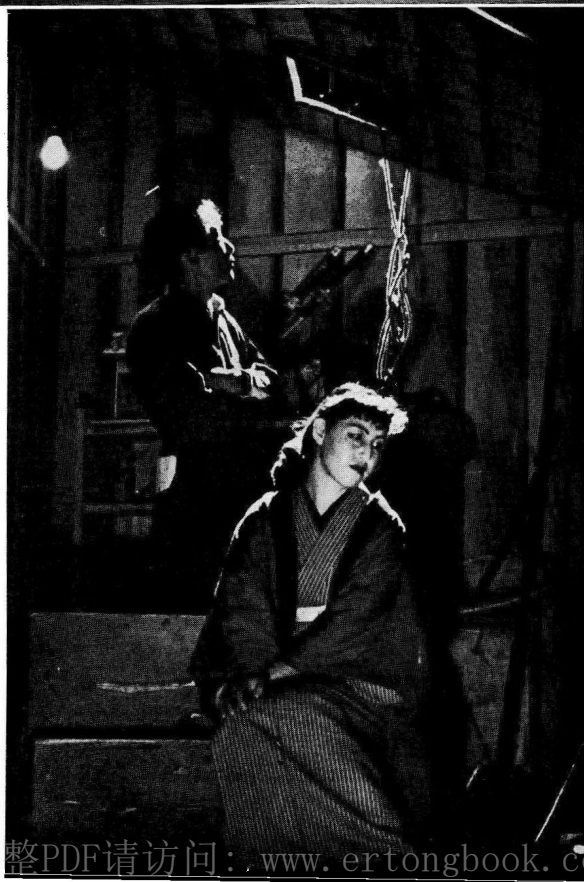
花 子 俳優座





俳 優 座

三ちゃんと梨枝



多
摩
劇
団



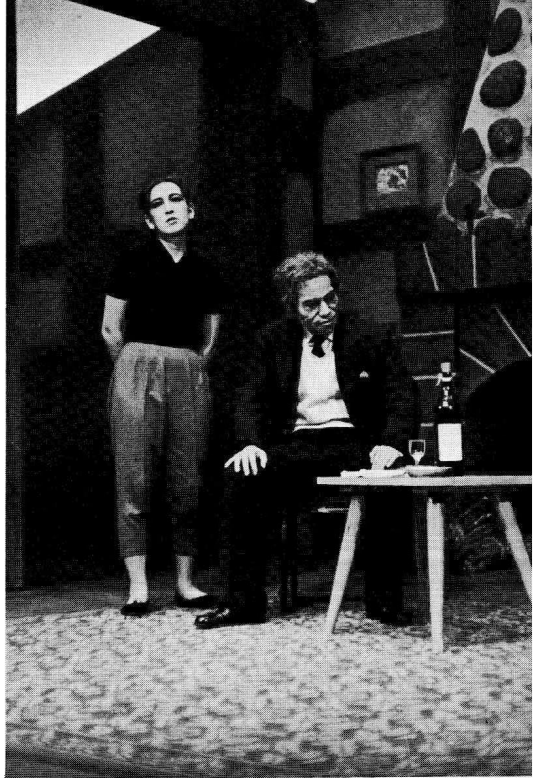
芸術劇場

骨を抱いて

くるみ座



教 育 俳優座



目次

女猿	七
花子	九
三ちゃんと梨枝	六七
赤い羽根	一〇五
骨を抱いて	一三一
どろ	一六五
教育	二五五
解説	三五
宮崎嶺雄	

女

猿

一
幕

登場人物

平井くみ

同 信

尾形晴雄

金子しま

末次里子

同 照子

黒服を着た人たち（A、B、C、D——朴、E女）

中年の男

昔は小綺麗であつたろうが、手は入れず、また空襲の煙を吹きつけられたりして、今では廃屋にひとしいようなみにくい孤愁をさらす洋館の小さいホールと応接間。後方、この二部屋をめぐってベランダがついているが、柱は落ち、手すりは割れ、応接間から外へ出る玄関に当たるところだけの屋根は突っかい棒などで支えられている。玄関から門へ通じる道。

応接間には円卓とすり切れたのを何とかごまかした大きなひじ掛椅子と普通の椅子二つ。「耳順^{じしゆん}荘^{さう}」という額がかかっている。その下に写真。

ホールはずっと広いが、ここは今、子供の遊び場になつていて、天井に渡した折紙細工と万国旗を紐で通したものの、七つ八つの子供の椅子、壁にはった手工や絵などでそれがわかる。いつぼうの壁際に教壇とオルガン。教壇の上にキリストの像。ベランダに通じる扉。二階へ通じる階段。階段の横にも扉。

秋の暮れ方だが空はまだ明るい。背景は火をかぶった痕のあるまばらな木立ち。ずっと遠くの丘にかけて空襲の焼野原が斜陽を受けて静まりかえっている。ベランダの向こうのブランコが揺れているのが頭だけ窓から見えるが、誰が乗っているのかわからない。

ホールのキリストの像の下で、くみ（肥満したからだには貫祿らしいもの）がうかがわれる。和服）その後、里子（洋装）が跪いて小声で祈っている。

くみ
里子

……われこれによりて頼もしく思ひてはせ来たり、罪人の身をもつて御前になげき奉

る。ああ御言葉の御母、わが祈りを軽んじ給わず、御あわれみをたれて、これを聞きいれ給え。これを聞きいれ給え。アーメン。(十字を切る)

くみ (立ち上がりながら) き、よいしょっと。くせになっちゃってね、近ごろ。

里子 (窓に寄り) 照子、待っててね、すぐだから。寒くないわね。

くみ あんまり漕いじゃ落っこちるよ、はは……。 (応接間に入り、ひじ掛椅子にかけ、卓の上の煙管^{きせ}を手にとる)

里子 (入口に立っている)

くみ なにしてんの。(火をつける)

里子 (半ば怖る怖る椅子にかける)

くみ で、その後……どう？ 勉強してる？

里子 うふん。(首をかしげる)

くみ 嬉しそうじゃないのさ。

里子 あら先生、そんな……。 (急に両手で顔をおおい、あわててハンケチを出して目に当てる)

くみ (黙って煙を吹かしながら発作のやむのを待っている) いくつになるのさ、あんたはいいい。

里子 だって久しぶりで先生の前に出ると、なんだか甘えなくなるんです。

くみ 私また肥ったでしょ。

里子 そうですね……。

くみ 瘦せようと思つてね、あすこの階段、わざと上がったり下りたりしてみただけだね、駄目なのよ。

里子 (笑つて) 長生きなさるわ、先生。

くみ はは……照子ちゃんも大きくなつたね、十だね、もう。だんだん似てきやしない？

里子 ええ、おそろしいくらい……。

くみ 末次さんの戦死の知らせで、あんたがさ、半氣違ひみたいになつて飛び込んだのも、ついこの間のようだが……。

里子 ええ……(思い切つて) 先生、私の生き甲斐を教えて下さい。

くみ (大袈裟に驚いて) 私だつて配給のお米食べてんだからあんまりびっくりさせないでよ。

戦争忘るべし忘るべからずか——洋裁はもうやめちゃつたの。

里子 一年通いました。(ゆっくり) 先生、私、さびしいんです。

くみ もったいないこと言うよ、この人は。

里子 そうかもしれない……洗礼を受けてしまつても同じことですの。かえつて前より苦しい……。

くみ そういう時期は誰にもあるもの。

里子 そうでしょうか。

くみ そうそ。だから勉強が大切な、勉強が。信者になつたから……。

里子 結婚したいんです。

くみ え、何だって？

里子 結婚したいんです。

くみ (目が光る) そりゃしたけりやおしなさい。

里子 したけりゃって……私、誰かに奉仕したいんです……奉仕したいんです。

くみ なおけっこう。

里子 いや、もうお話しないわ。

くみ なぜさ。

里子 おからかいになる。

くみ 私？ そうかね、そうとれたかね。ごめんごめん。で、相手の人は？

里子 子供が一人あります。照子より一つ下の男の子。

くみ うまくゆきそう？ いえその子供と。

里子 照子と仲良しですの。近所ですから。

くみ はあ！

里子 でも、奥さんがまだあるんです、病気で里へ帰って。

くみ ふーん。

里子 それにお舅さんも姑さんもいます。しかし私が来れば別居するとはおっしゃるんですけ

ど……。

くみ ちょっと……その、奥さんがまだあるってのは……籍がまだ？

里子 ええ。もちろん、私が来ればきっぱり別れるとは……。

くみ きっぱりね。

里子 ええ。でもね先生、奥さんのお里は、その方の会社の重役なんですの。

くみ ははあ。

里子 ですから……。

くみ あんたその人信用してる？

里子 (うなづく)

くみ それだけ条件の悪いのも承知。

里子 (うなづく)

くみ ……ねえ、まだ言いたいことがあるんじゃないの……え？ ……どう？

里子 男の面目を潰さないでくれって、その方、その時。

くみ 女の面目はどうなのさ。

里子 (耳をかさず) こんなこと言い出すのは一生に一度だ。かりそめのことと思わないでく

れ。男の面目を……。

くみ (鋭く) 里子さん……あんたのさびしいわけわかったよ。

里子 先生、私、許されるでしょうか。

くみ 許されないね。

里子 やっぱり……。

くみ 妻のある男と密みそごとするなんて、カトリックでは許されません。

間。

くみ もしどうでもよかったのなら、あんたその人と一緒になるつもりだったんでしょ。それをわざわざ聞きにきたわけね。ご苦労なこった。

里子 (いきなり立ち上がる) いいわ。私、帰ります。

くみ まあお待ちよ。何もそう……。

里子 いいえ。たくさんです。(行きかけて振り向き、首をかしげてにっこり笑い) 先生は、人間を愛したことがおあり？ ……(身をひるがえして居間、ベランダを抜けて庭へ出る) お待ちどお、照子。行きましょ。帰りましょ。

親子去る。

くみ (身動き一つしない。やがて立ち上がり、ホールの扉のところで落日を眺めているが、それをしめ、窓掛をおろして、二階へ上がろうとする)

声 くみさん……君はいつたい、僕を愛してくれたことがあるのかい、え？

くみ (ぎょっとして振り向く)

いつの間にか、今まで彼女がかけていたところに、瘦せて目ばかり光っている小柄の男が深々とあまりこむようにかけている。くみ、いきなり、キリスト像の下に行き、十字を切る。

暗転